

倉橋由美子の『暗い旅』における禅とジェンダーの メモランダム

渡邊英理・ペイジ・ジョーンズ

倉橋由美子は学生時代にデビューをした作家である。しばしば言われるように、これは同じ年に同じ四国で生まれた大江健三郎と共通している。倉橋は高知で大江は愛媛で1935年に生まれた。サルトルをめぐる卒業論文を執筆した点でも共通項を持つ両者の文学には、それぞれの方向性での「性」と「政治」の問題化を見ることができる。倉橋が『暗い旅』を刊行した1961年は、大江が『セブンティーン』とその続編である『政治少年死す』を発表した年である。大江が男性主体の性的身体と国家主義の関わりを問う小説で大文字の「政治」と「性」の関係性に切り結んでいた頃、倉橋もまた初の長編小説のなかで、旅するひとりの女性の「個人的な身体」から個々の「性」や性愛に孕まれる政治性を焦点化していたと言えるだろう。

以下では、ペイジ・ジョーンズが、倉橋の『暗い旅』を禅とジェンダーの視角から一考察を加える。これは、ペイジ・ジョーンズが日本の静岡大学留学時に行った研究成果の一部である。倉橋は1966年にアメリカのアイオワ大学に留学しているが、ペイジ・ジョーンズは同大学で日本文学を専攻した卒業生であり、今後はアイオワへの旅も含んだ倉橋文学をジェンダー的視座から研究を進めていくことを予定している。

『暗い旅』¹という小説は、1961年10月に東都書房により発刊された、倉橋由美子の最初の長編作品である。この小説の主人公は、二人称の「あなた」と呼ばれる24歳の女性である。小説の時間は、発表時の1961年頃だと考えられる。恋人、もしくは婚約者であったミチオが失踪したと知り、主人公の「あなた」は

¹ 倉橋由美子『暗い旅』（東都書房、1961年／新潮文庫、1971年）。なお、本論文の執筆に際し、荒木香帆氏に日本語のチェック等のサポートをいただいた。記して感謝したい。

二人の「愛の遺跡」、彼と共に時間を過ごした場所を訪れに行く旅へと出発する。死やミチオについて考えているところに、「あなた」は京都行きの電車の中で知り合いの佐伯に再会し、彼と新しく恋愛するかどうか決めることを迫られる。実のところ、この小説は、実際の旅についての物語というよりも、過去から現在、「いま・ここ」へと向かう旅の物語である。移動をしている「あなた」は過去の記憶に思いふけるが、歩みを止め立ち止まる「あなた」の意識は自分の身体に、そして自分の周囲に、自分がある「いま・ここ」に向く。こうして「あなた」は自分が常に否定していた女性身体を受け止めるようになり、新しいアイデンティティーを築きはじめる。

移動している場面で主人公の「あなた」は自分の思い出を繰り返し想起する。歩いている時も、バス、電車、タクシーに乗っている時も、周りの事にあまり気づくことなく過去の自分、失踪した恋人のミチオに集中する。この点から、物語の中の実際の移動は現実の場所に行くためというより、過去にすぎた、現実から逃避し「いま・ここ」を避けるための移動だと考えられる。小説の冒頭で、バスがくるまで15分間待たないといけなくて知った「あなた」は「いらいらしながらバス乗り場をはなれて駅前広場を横切」って、すぐにタクシーに乗る。ここには、「あなた」の「いま・ここ」に対する抵抗が現れている。タクシーまで歩いている時も、タクシーの中での移動時間も、「あなた」は過去や過ぎ去った自分の行動の理由ばかり考えている。実際、あちこち鎌倉の街を歩いている時に「あなた」は、「それは過去のなかへ迷い込んで行こうとするようなものだ」²と述べている。東京から京都まで電車で運ばれている時間はほとんど思い出の中に没入している。電車が京都に着くと、「あなた」は「意外に短い旅だった、いや、旅というよりもこれは五百キロの距離の移動にすぎない」³と顧みる。電車に乗っている間に行われた旅は現実の土地から土地への旅というより、主人公の心の旅だと考えられる。

「あなた」は、立ち止まる場面では自分の周りに気づいていく。「あなた」は過去や思い出ではなく、「いま・ここ」に気づくことになる。小説のなかで過去・記憶は移動することであり、現在・現実には立ち止まることにある。両者は対立的に現れている。海岸から戻り、すぐに鎌倉駅に着くと、腕時計が止まっているということに「あなた」は気がつく。腕時計が止まるのは、時間が止ま

² 『暗い旅』 p. 7

³ 『暗い旅』 p. 173

るという意味であろう。時間が止まるとは、すなわち幻である過去や未来のことが存在しなくなり、「いま・ここ」だけが残ることを意味する。そして次に「あなた」はお腹が空いているという生理的現象に思い至り、喫茶店に入って、しばらく思い出ではなく食べ物について考える。鎌倉から吉祥寺に戻って「少しでも考える時間を避ける」ために、主人公は喫茶店に入って、一つの場所に留まりながら、周りの音楽や人間に関心を向け考える。以上のことから、主人公が食べ物、人間観察、芸術鑑賞などで「いま・ここ」に戻るというパターンが見えてくる。

主人公の「あなた」の恋人であったミチオは、過去や「あなた」の理想の世界の象徴として、「あなた」のアイデンティティーと強く繋がっていた。「あなた」は現実を避け、自分の身体から意識を逸らし、身体に注意が向かないように彼の思い出に縋る。現在までの彼女の人生の全ては、社会の定められた役に従って「女を演じる」ことであり、そのために「共演者」のミチオが欠かせなかった。ミチオがいた頃は恋人同士であったが、二人は性的な交わりを持たないという約束をし、彼女は女性としての身体を意識せずに恋愛を行った。しかし彼の喪失を経て、改めて自分の身体が存在とその意味を考えねばならなくなる。そのためには過去を手放し、現在に戻って身体が存在を認めなければならない。

「あなた」は倉橋の作品によく出てくる「女性身体という烙印」⁴からの自由を望むが、逆説的に、彼女が嫌うその身体は、彼女を「いま・ここ」に沈めるための錨でもあるので、過去から「自由」になるためにはその身体を受容する必要がある。作中では「肉体というものを信じない、できることならそんなものはないほうが好ましい…」⁵と、彼女の身体に対しての抵抗が表れる箇所がある。「あなた」が自身の肉体を嫌悪する理由は、「女であるのではない、女であると宣告されたので、その宣告をひきうけるために女であることを演じているだけなのだ」⁶と説明される。「あなた」は、自分の身体が不随意なもの、つまり自分の意思に関わらず生理がくる、妊娠する身体であるということを知っているが

⁴ 鈴木直子「リップ前夜の倉橋由美子—女性身体をめぐる政治」(北田暁大・野上元・水溜真由美『カルチュラル・ポリティクス1960/1970』せりか書房、2005年) p. 35

⁵ 『暗い旅』 p. 130

⁶ 『暗い旅』 p. 116

ゆえに、「あなた」はその身体を捨てたくなる⁷。しかし彼女が肉体の死を迎える以外は、思い出への回帰を以てしてもこの身体から離れることはできない。その事実ようやく思い至った時、彼女はその身体を認める作業へと踏み出す。「あなた」は現実を克服する手前で、身体を介して現実の重みを抱き留めねばならない。

主人公の「あなた」は禅の修業、または現代的に言えばマインドフルネスという道具を、ミチオや過去から自身を解き放ち、現実を受け止めるために利用する。「あなた」の旅の最後の目的地が禅寺の多い京都であるというのは、これに関係があるだろう。禅の目的は「悟り」を開くことにあり、この悟りは自由になることに相当する⁸。現代のマインドフルネスは、禅の原則のもとに考え出された精神的な治療である。マインドフルネスを行う時は座禅のように頭の中にある考えにとらわれず周りに見えるもの、聞こえるもの、触れるもの、嗅げるもの、感じられることだけに集中する。つまり、「いま・ここ」に気づくことに集中することを意味する。したがって「マインドフル」というのは、過去の思い出や未来の悩みなどではなく、「いま・ここ」、実際の自分の周囲にのみ気づき向かい合っている状態である。主人公が立ち止まって自分の身体に気づくことは、このマインドフルネスに似ている。京都への車中、「あなた」は目を閉じて思い出にふける。過去の想起から目覚めた「あなた」はついに、自分の身体から逃げられないという事態に正面から向き合う。

「目を開ける。あなたは列車のなかにいる。これがあなたの場所だ。あなたが四七キロの重さをもつ物質の塊であるかぎり、あなたは場所をもち、あなたの場所に粘着していなければならない、どこまで逃げて同じことだろう、どんな遠い土地へ逃げていったとしても、あなたは自分の身体を下手な尾行車のようになくことはできないし、あなたの場所をおきざりにして、軽い虚無の場所へ飛びたつことはできないだろう、そしてあなたの悲しみもまた肉体のかたちをしてあなたの逃亡についてまわる…」⁹。こうして身体から逃げられないと悟った主人公の内面に、様々な思想の変化が現れ始める。

⁷ 片野智子「〈女の仮面〉を被るとき—倉橋由美子『暗い旅』と初期短編」(『日本近代文学第97集』、2017年)

⁸ 鈴木大拙『禅と日本文化』(チャールズ・イー・タトル出版、1959年) p. 5, 16

⁹ 『暗い旅』 p. 160

主人公は電車の中で、偶然、自分の学部時代の先生であった大学教授、「佐伯」と再会する。「あなた」と佐伯はともに京都で電車を降り、同じホテルに泊まることを決める。彼と一緒に過ごす夜は、小説の中で「あなた」が一番長く同じ場所に留まる場面でもある。彼女は、佐伯と一夜を共にするか迷うが、「あなたはぼんやりと立っているだけだ……」と自分が立ち止まっていると気づいて、「利巧ぶった選択よりもなるようにするほうが愉しいだろう……」¹⁰と同じホテルに泊まる決断を下す。佐伯と同衾する行為も、自分の身体の受け止めにあたるであろう。「すくなくとも肉の結合が行われる時間…は時間の死だ」¹¹と主人公は考える。駅で腕時計が止まった場面と同じように、ここでも時間の停止がマインドフルネスに当たると思われる。

「いま・ここ」に対する抵抗が減るにつれて、主人公は次第に自由になる。「ああ、はじめてあなたは自由になったのだ」¹²と、ちょうど佐伯と性的に交わる直前に「あなた」は気づく。倉橋の処女作の『パルタイ』について、この『暗い旅』のなかで「「私」が求めた「自由」は、『パルタイ』からであると同時に、一方的に眺められ犯される「第二の性」という符牒＝女性身体からの自由でもあるだろう」¹³と論じられている。『パルタイ』の「私」と同じように、『暗い旅』の「あなた」は女性身体からの自由を求めている。禅の目的である「悟り」が自由に相当するとすれば、その自由を手に入れるために、禅の考え方、マインドフルネスなどが参照されることは不思議ではない。

佐伯という男は文化評論家としても名を馳せる40代の大学教授で、社会の権力者または家父長制の象徴になぞらえることが出来る。離別したミチオとは異なり、主人公の「あなた」にとって、彼は理想的な「共演者」ではなく現実の世界の中を生きるための「共犯者」のような存在である。「あなた」は佐伯との一夜を経て彼を「愛する」ことができないと認める。佐伯が、彼女が受け止めねばならない現実、つまり家父長制の象徴だとすれば、「あなた」が彼と寝る行為は自分の身体と現実を受け止める意味を持つ。「あなた」は現実の世界で起きた身体の重なりを経てなお、彼を愛さないことを選択した。このように「いま・

¹⁰ 『暗い旅』 p. 179

¹¹ 『暗い旅』 p. 197

¹² 『暗い旅』 p. 224

¹³ 『暗い旅』 p. 34

ここ」の現実の出来事を受け止めることが、そのまま現実を好きになるということには直結しない。むしろ、現実を受け止めた後の「あなた」の心理は自分の身体も、周りの世界も自分を有利に処する強みとして利用する方向へと結びつく。佐伯との夜を越えた朝、「あなた」は自身に化粧を施す。彼女は口紅が好きではないが、その顔を彩りながら「しかしあなたの顔はこれで鋭くなる、画竜点睛だ、このオレンジ色に輝く唇があなたの生き生きした仮面を完成した」¹⁴と独り言ちる。この「好きではない口紅」も女性身体の象徴の一つだと考えられる。ここで「あなた」はこの象徴を受け止めるだけではなく、役に立つ道具として活用するようになる。主人公の「あなた」はさらに次に向かうが、この段階で彼女の思考の枠組みは極めて「マインドフル」な状態になっていることがうかがえる。「愛の遺跡」を訪れるために企図されたこの旅は、「あなた」が次に行く場所も、いつ帰るかということも、ミチオとの思い出によってではなく、「所持金の涸渇」¹⁵という現実の問題に左右される。過去に縋り付きながら自分の身体を否定していた「あなた」は、自分の身体を介して現在・現実とつながり、「いま・ここ」という地面に足をつけている。「あなた」に大きな「マインドフル」な変化が到来したのだ、と結論付けられる。

¹⁴ 『暗い旅』 p. 235

¹⁵ 『暗い旅』 p. 236